

Title	書評：吉原直樹著『コミュニテイ・スタディーズ』作品社、2011年
Sub Title	
Author	西山, 志保(Nishiyama, Shiho)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2012
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.17 (2012. 7) ,p.124- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20120700-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：吉原直樹著

『コミュニティ・スタディーズ』作品社、2011年

西山 志保

新自由主義を背景として過度の個人化が進展し、無縁化が進む現代社会において、生活の共同から立ち上がる「コミュニティ」というとらえどころのない概念を、今、改めて問い直す本書の意義は大変大きい。これまでも社会学を初め、コミュニティに関して膨大な研究が蓄積されてきたが、本書で想定されているコミュニティとは、決して伝統回帰的な閉鎖的な共同体でも、公的なものに丸ごと抱合されるものではない。「近代日本においてコミュニティとして語られてきたものはその実態的基盤を喪っており」(p.353)という認識をもとに、本書では「生きられる共同性」をキーワードにして、「公的なもの(=公助)、私的なもの(=自助)、そして共的なもの(=共助)に起きている質的な変化を見据えたうえで、生活の共同から立ち上がるコミュニティを想到する必要がある」(p.2)という問題意識が貫かれている。まさに「ポスト成長社会」におけるコミュニティのかたちを、「グローバル化」「モビリティ」との複雑な関わり合いから探究しているのが本書の特徴だといえる。その意味で、コミュニティ論のパラダイム刷新を試み、新たなコミュニティの社会設計を図る本書は、グローバル化とともに多くの問題が噴出している現代社会において大きな意味をもっているのである。

筆者の立場は、コミュニティを帰属ととらえ「場所と関係する帰属」の必要性を強調するコミュニティタリアンとも、コミュニティの結束の弱体化を背景に社会的ネットワークや社会関係資本の蓄積に思いをめぐらせるリバタリアンの主張とも異なり、多元的市民社会の基盤となる「弱い普遍主義と弱い文脈依存性」の共存状態としてとらえている(p.19)。コミュニティに関する議論が前述2つの立場に収斂されることが多い中で、テーマを「共同性と公共性」、「ガバメントとガバナンス」という2つのテーマにしぼり、「生の複数性」をメルクマールとする「相互性」に根ざした公共性と、また地域を構成する多様なアクターの「節合(articulation)」に基づく「ガバナンス」を前提としながら、外に開かれ中間領域的性格をもつ新たなコミュニティを実践的次元かつ思想的次元で設計することを目指している。しかもグローバリゼーション・スタディーズと市民社会論を2本柱にすえて、「節合」や「創発性」からなる「非線形的思考」によって貫かれたコミュニティ・スタディーズを展開している。

こうしたコミュニティへの視点は、国家や市場とは異なる第3の存在であるNPOやボランティア・セクターが近年大きな注目を集めていること、そこでの共同性が「選べない」閉鎖的地縁・血縁とも異なるつながりに基づいていることと極めて親和性をもっているといえる。

本書の構成は以下の通りである

序章	コミュニティ・スタディーズのために
第1章	コミュニティへの多元的問いかけ
第2章	地縁と町内会の間
第3章	「戦後社会」と町内会
第4章	防災コミュニティの社会設計の条件
第5章	開かれた都市空間と安全安心まちづくりの課題
第6章	ソーシャル・キャピタルとしての地域通貨の可能性と課題
第7章	まちづくりの論理と倫理
第8章	グローバル化とコミュニティ
第9章	ゲーテッドコミュニティ再考
第10章	「ポスト開発」のグラスルーツ
第11章	変容する移民コミュニティ
終章	「ポスト成長」社会におけるコミュニティの社会設計のために

本書は2部制になっており、第1部では「ゆらぐコミュニティ」の諸相を多面的にとらえ、コミュニティを再審するための課題の抽出につとめている。まず第1章ではコミュニティが問い直されている文脈を、①防犯・防災、②社会的排除と包摂、③中間集团的・ネットワーク論、④自治・分権、から解き明かしていく。今日、コミュニティは上から鼓吹される傾向があるが、「個人を凌駕する共同性の樹立」の危険性を指摘し、それを受容する共同体主義が社会のすみずみにまで浸透していることを警告している。

その事例の1つとして、第2章、3章では、主に上からのガバメントの枠内にあり、互助の伝統に底礎する「共同体主義」を基盤にしているといわれる地縁＝町内会を取り上げ、その歴史性、イデオロギー化されていく過程を分析している。町内会を特徴づける「場の規範」＝位相的むすびつきが、複雑性と節合を誘因とする「創発性」が立ち上がるための条件を織りなしたが、実際には結びつかなかったこと、それは横の系列における規範意識・美的感受性が日本人の底のない醇風美俗へと置き換えられ、縦系列における秩序保持に貢献することになったことを明らかにしている (p.86)。

さらに防災・防犯をテーマとして、「ゆらぐコミュニティ」の実態が浮かび上がる。防災コミュニティの担い手としての町内会の役割が3.11の東日本大震災以降、非常に注目を集めている。防災ガバナンスとは、制度そのものというよりは、「新たな制度の理念的基礎を提供するもの」であり、そして防災に対して役割を担う行政、ボランティア、市民の協働のベースをなすものとして基底的位置を占める地域コミュニティ＝町内会がきわめて重要な役割を果たす。しかし町内会は、ガバメントの機制に抱合されている状況を打破しない限り、様々なアクターがせめぎあう地域コミュニティの土台を築くことができないという問題を抱えている。まさに町内会が抱えるジレンマである。

さらに筆者は日本の町内の特徴として、多様性を受け入れる原構造を有しながら、近代国民国家の機制のもとで町内会へと制度化される中で、過度なまでの「安心安全な社会」を目指す傾向が強まっていると警告する。そもそも日本の都市は、雑多で多様な人々が暮らす地域コミュニティが非排除性と非同質性を包摂していた。しかし近代の都市計画における平滑化（フーコー）、そして町内会への制度化がこうした状況を変化させ、排除性と同質性が著しく脈動する「安心安全な社会」へと変化させていった。本書で取り上げられているアメリカの郊外やゲーテッド・コミュニティなどがその典型であるが、その一方でこうした「相互監視と異端摘発のコミュニティ」への批判に基づき、寛容性や多様性を包み込む開放的な都市が日本で存立可能なかが問われている。「開いて守る」安心安全まちづくりは、親しい近隣づきあいに担保されてきた「生活の共同」、さらにはガバナンスという新たな結びつきを基盤とした「差異」や「他者」を受け入れるコミュニティによって可能になる。そして「利便性が反転して利便性を否定する」といった近代化がもたらしたジレンマは、ガバメント型の「都市計画」に対して市民協働のガバナンスに基づく「まちづくり」にも見てとられる。

続く第2部ではグローバリゼーション・スタディーズの成果を生かしながら、比較社会論的視座に立ち、「コミュニティの転回の動向」に光があてられている。グローバル化の中で人・モノ・カネ等の移動が頻繁に起き、国民国家の「境界」の揺らぎが起き、またそこから再埋め込みという事態が同時に発生している事態を、筆者が長年たずさわってきたフィールドの現場から浮かび上がらせている。

そしてグローバル化に伴走しつつも、市場の影響から遮断された小さな世界に閉じこもるのではない、もう一つのコミュニティという第3の場所にいたる視軸/思考回路を、「創発性」を重要キーワードとして描き出す。「創発性」とは、ヒト・モノ・コトの複合的なつながりから生じる「一方で開放性を、他方で異質性を」兼ね備えた動的な関係を通底するものであり、環境を媒介とした人と人との関係づけ(相互作用)の分析を通して浮き彫りにできる。「住むこと」を立ち上がりの契機としながらも、一定領域内で完結する閉じた関係に収斂するのではなく、人と人との「あいだ」、人と自然との「あいだ」の存在様式を再確認し、横の緩やかなリゾームとして広がっていく世界に根ざしている。

こうした創発性に基づくコミュニティは、アメリカの郊外を始原とする高度に同一性と安全性が求められる「ゲーテッド・コミュニティ」に見出すことは難しい。とはいえ公の否定をメルクマールとする新自由主義の建造環境であるゲーテッド・コミュニティは、グローバルな社会秩序の編成においても重要な役割を担っていることが9章で分析されている。10章、11章では、筆者の長年にわたる「ポスト開発」のバリ社会での調査に基づき、グローバルツーリズムのインパクトにさらされている日常的媒介組織としてのバンジャールの現状、また移民コミュニティの現状から、地域コミュニティの転相が分析される。「貧困の共有」という慣行が多元的集団構成の中で変容しながらも継続し、そうした構造もグローバル化に伴い地域を超えるネットワークを創出していることが指摘される。

本書で構想される「ポスト成長」社会におけるコミュニティは、「市場経済を超える領域」（広井良典）となり、人々がセーフティネットを構築する際の要となる。新自由主義（自助）と共同体主義（古い共助）という一見、相対立するものが、グローバル化の進む「ポスト成長」社会においてはセーフティネットの張り替えをめぐる共振する。だからこそ、グローバル化におけるコミュニティの形成は、グローバル化とのせめぎ合いの中で、創発的なものを中核にすえた「生きられる共同性」（多様な構成主体の相互行為を通して新たな変化を生み出すような人々の関係性）を奪還/取り戻しを抜きにしてはあり得ないと結論づけているのである（p.362）。

都市社会学や地域社会学の第一人者である吉原直樹氏は、都市理論のみならず東南アジアを初めとするフィールドワークをベースとして多くの著作で影響を与え続けている。本書に収録されたコミュニティに関する議論は、社会学の枠内に留まらず、哲学、歴史学、地理学など幅広い専門知を「節合（articulate）」したところに成立しており、いわゆるコミュニティ・スタディーズの集大成として高く評価されるべきものだといえる。その意味で、本書は歴史的な生産物であるコミュニティが新たに直面している「ゆらぎ」の内実や問題状況の解明のみならず、新自由主義や共同体主義に回収されないコミュニティの存立基盤と構成要件に基づく新たなパラダイムを問題提起しているといえる。とりわけ生活の共同から立ち上がるコミュニティにおける新しい関係性をとらえる枠組みを、「節合」や「創発性」といったキーワードで描き出している部分は、同じく地域社会のフィールドワークに関わる評者からすると非常に説得力のあるものであった。

最後に、昨年度、日本は東日本大震災という悲しい出来事に襲われた。緊急救援から被災者の生活再建へと課題が移行するにつれ、人々の支え合いに基づくコミュニティの再建が大きなテーマとなっている。「絆」という言葉が至るところで注目されているのも、そうした現象を示している。しかしこれまでの農村コミュニティで守り継がれてきた共同体主義や相互扶助の伝統を回復させれば問題解決するということでもない複雑な問題が発生している。津波の被害を受けた地域からの高台移転により、移転できる人とできない人、自宅が全壊した人、全壊しなかった人、同じコミュニティ内でも復興格差が生じ、また古い共同体の伝統がむしろ新しいコミュニティ形成を困難にしているという話も聞かれる。こうした伝統回帰的な共同体主義でも自由主義的な自助努力でもない、まさに「生きられる共同性」を、被災地の復興過程ではどこに見出すことができるのか、東北大学で長年にわたり教鞭をとられてきた筆者に是非とも聞いてみたいと思う。

これからコミュニティを学びたい人、グローバル化におけるコミュニティの動向を深く理論的・実践的に学びたい人に、本書は多角的にコミュニティを分析する視座を提供してくれることは間違いないだろう。

[本体価格¥2600 税別]

(にしやま しほ 立教大学)